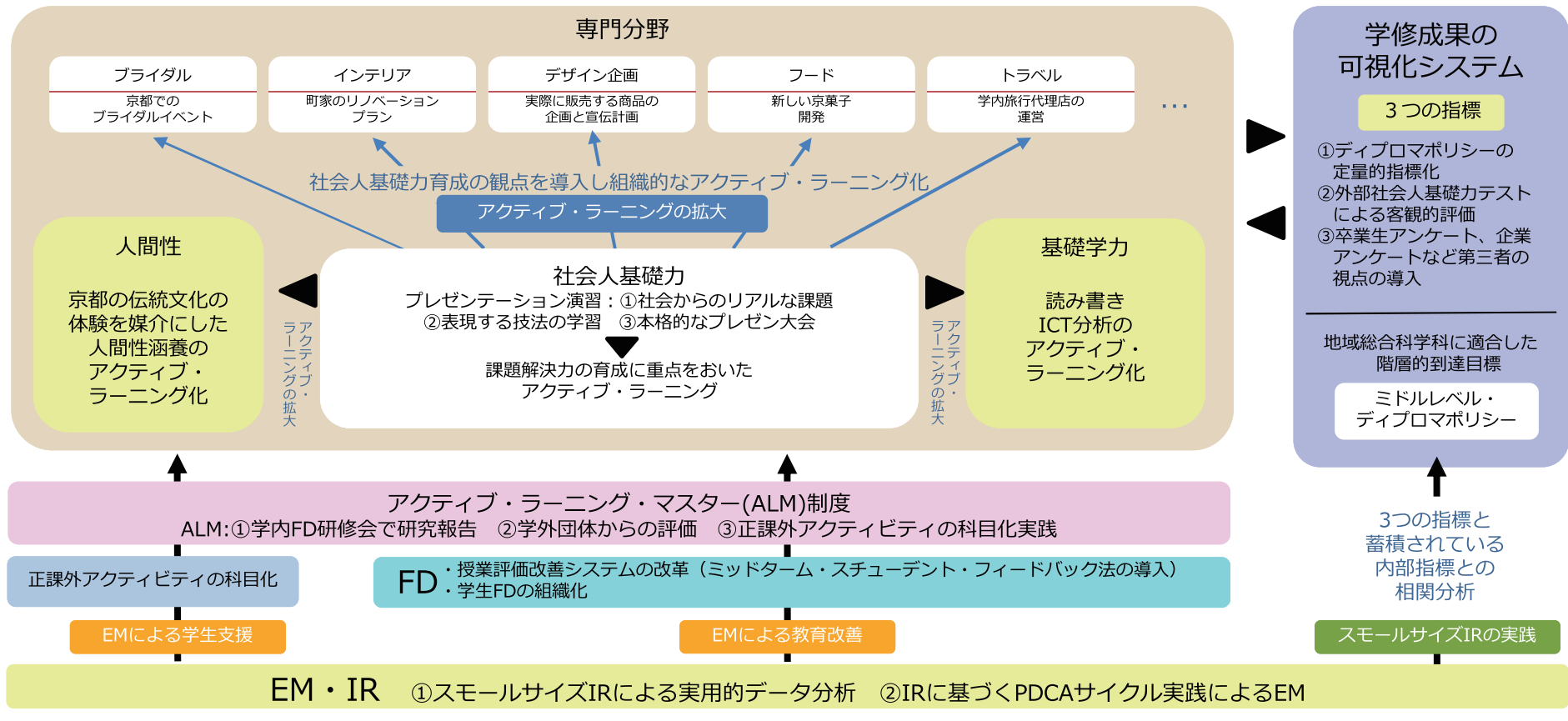


大学等名：京都光華女子大学短期大学部

テーマ：テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）・Ⅱ（学修成果の可視化）複合型

本取組は、地域総合科学科として地域社会の多様なニーズに応えられる短期大学を目指す改革を推し進めるための中核をなすものであり、①地域総合科学科に適合したアクティブ・ラーニングの活性化と②地域総合科学科に適合した学修成果可視化システムの導入の2つのパートからなる。①ではアクティブ・ラーニング導入による社会人基礎力育成の教育の実績を基に、アクティブ・ラーニングを、人間性、基礎学力の領域、さらに専門分野へと拡大していく。それを保障するのがアクティブ・ラーニング・マスター制度の導入である。一方、地域総合科学科は多様な専門分野構成を持っていることを踏まえ、②では、学科のディプロマポリシー以外に専門分野ごとのミドルレベル・ディプロマポリシーを導入する。そして、この階層的な到達目標を基に3つの指標による可視化システムを構築する。



事業の成果

| | 26年度 | 28年度(目標値) | 30年度(目標値) |
|-----------------------|-------|-----------|-----------|
| アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合 | 90% | 100% | 100% |
| 学生の授業外学修時間 | 3時間未満 | 10時間 | 14時間 |

本事業により、直面している課題を基本的に解決し、地域総合科学科として、地域社会の多様なニーズに応えられる短期大学を目指す改革をさらに加速

地域総合科学科に適合した教学改革

-AP事業を中核としたアクティブラーニングの活性化と
学修成果の可視化-

平成29年10月26日
京都光華女子大学短期大学部
ライフデザイン学科 小山 理子

*Koka's Heart**

発表内容

- 1 本学の紹介
- 2 アクティブラーニングの活性化
 - ・ 社会人基礎力を軸としたアクティブラーニングの導入
 - ・ 成果と課題
- 3 学修成果の可視化
 - ・ ディプロマポリシーの定量化評価
 - ・ 成果と課題
- 4 まとめと今後の課題

ライフデザイン学科の課題

課題

- ・幅広いカリキュラム体系により、「何ができるようになったか」をどのように提示するか？
- ・主体的な学びをより重視する方向に、いかにして合わせていくか？
→ **アクティブな学び(アクティブラーニング)の導入**
- ・どのように学修成果を可視化していくか？
→ **ディプロマポリシーの達成度の定量的評価**

改革構想

地域総合科学科として地域社会の多様なニーズに応えられる短期大学に！

文部科学省大学教育再生加速プログラム(AP)事業(改革構想の核)

- (1) 地域社会が求める人格と教養に優れ、社会人基礎力に秀でた専門的能力も兼ね備えた人材を送り出すために、幅広い専門領域を抱える地域総合科学科にふさわしいアクティブラーニングの学習プログラムを開発し実施
- (2) 地域総合科学科に適合した学修成果可視化システムの導入

3

② アクティブラーニングの活性化

4

アクティブラーニングの導入に向けて

3つの手順

①社会人基礎力の育成を重視

→プレゼンテーション演習からスタート

②プレゼンテーション演習の成果を各分野へ拡大

→ワークショップなどを通じて実践例や課題を共有

専任教員全員がH28年の授業からアクティブラーニングを実践

③ALM制度でアクティブラーニングの活性化を保障

→『個人レベル』の制度と『組織レベル』の制度の2つを一体化し、目標を常にスパイラルアップする仕組みも取り入れる制度を構築。制度の名称も含めて全員で検討中

5

どの科目をアクティブラーニング化するか？

地域総合科学科 = さまざまな分野の約150科目

↓

アクティブラーニングを一律に導入するのは困難

特に、専門分野でのPBLなどのアクティブラーニングは、他の科目には適合しない可能性が高い

必修科目の「プレゼンテーション演習」からスタート

- ・そもそも活動性の高い授業
- ・社会人基礎力(=講義では育成が難しい能力)の育成を目指している
- ・1年生前期の必修科目のため、学生は入学時にすぐにアクティブラーニングが経験できる
⇒“基礎”は“ベーシック”でなく“エッセンシャル”

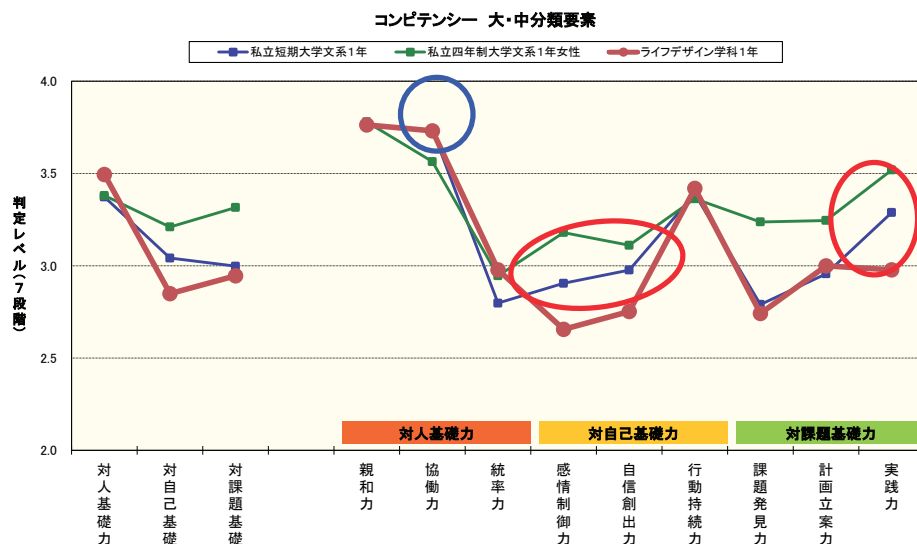
6

PROGの結果を活用

「PROG」の結果(2014年度生1年生後期)

本学の学生は全国の短大生や女子学生に比べ、

- ・「**協働力**」が高い = 強み
- ・「**自信創出力**」、「**感情制御力**」、「**実践力**」が低い = 弱み



7

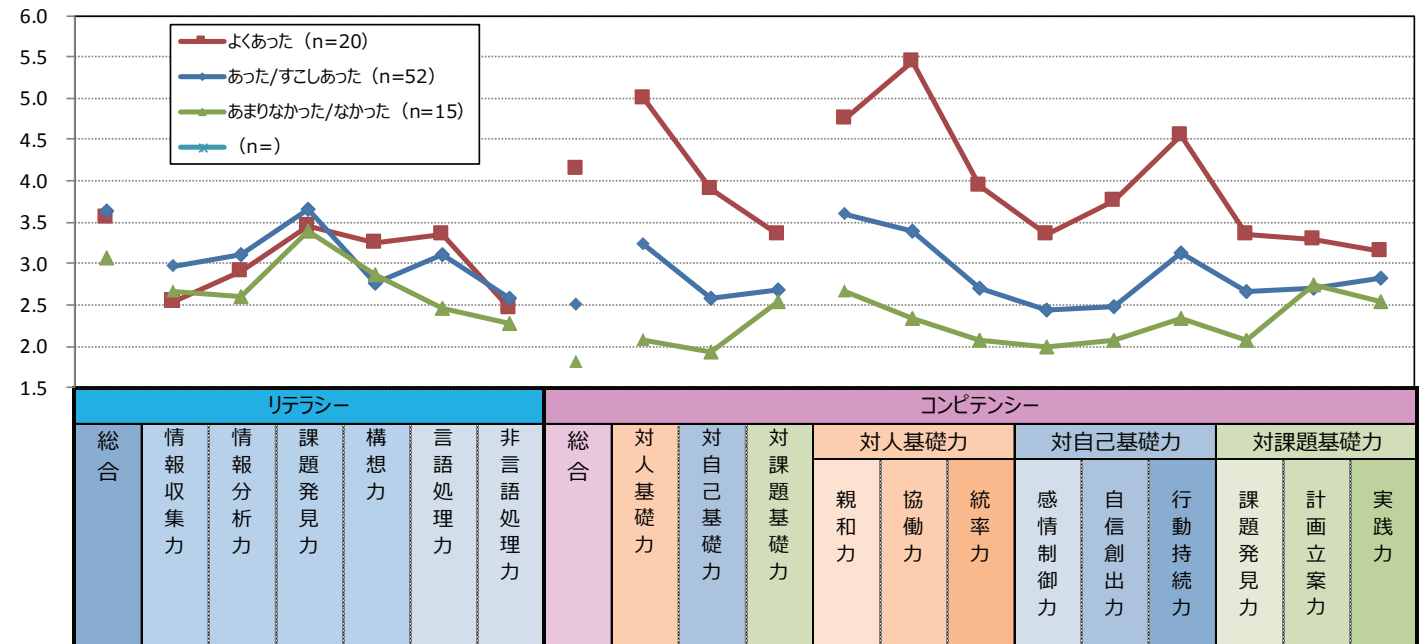
高校時代の学習行動調査から見た本学の学生像

チームで協同作業の経験は多いが、
プレゼンや企画立案を経験したが少ない。
アルバイトの経験は多いが、
授業の予習復習の経験は少ない。

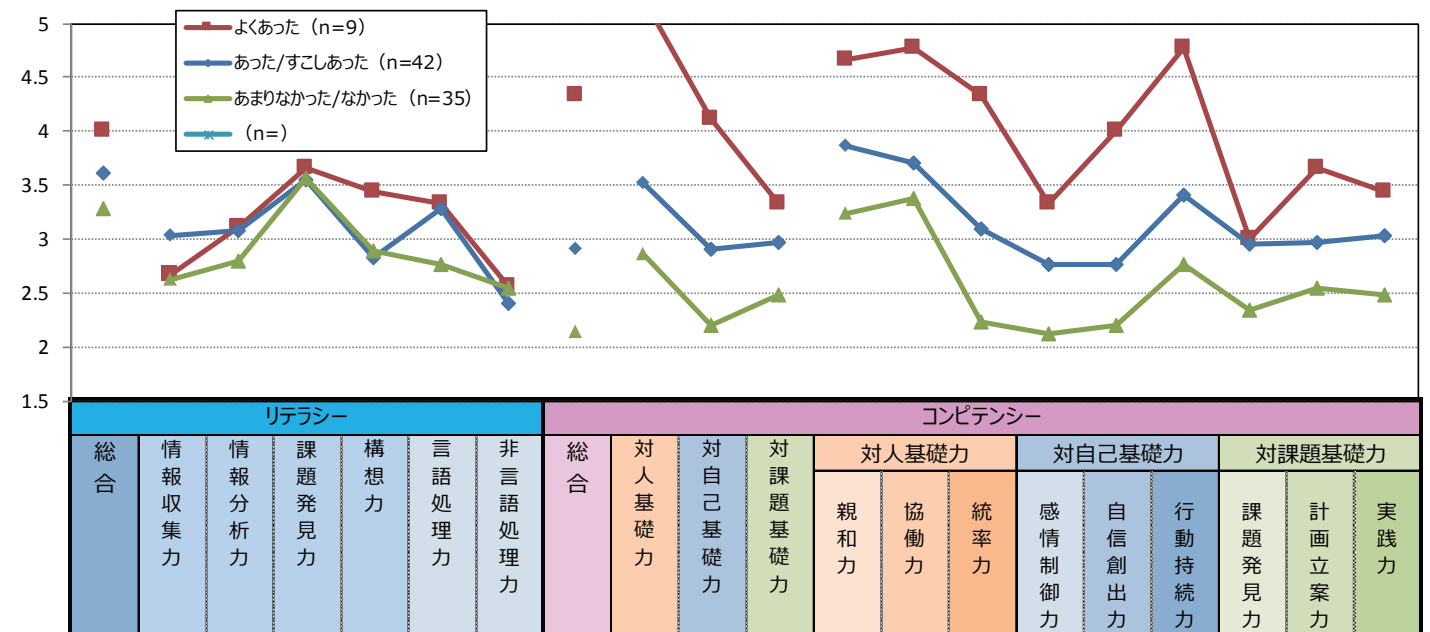
| | | なかった | あまりなかった | 少しあった | あった | よくあった |
|------------------------------|---------|------|---------|-------|------|-------|
| | (%) | | | | | |
| 他学年の学生との交流 (部活など) | (n= 87) | 13.8 | 11.5 | 19.5 | 14.9 | 40.2 |
| 社会人との交流 (アルバイト、ボランティアなど) | (n= 87) | 11.5 | 10.3 | 19.5 | 17.2 | 41.4 |
| チームで力を合わせる協同作業 | (n= 87) | 11.6 | 16.1 | 40.2 | 35.6 | |
| グループでの議論で、自分の意見を述べること | (n= 87) | 3.4 | 13.8 | 27.6 | 32.2 | 23.0 |
| グループでの議論で、リーダーや司会の役割を担うこと | (n= 87) | 13.8 | 26.4 | 20.7 | 21.8 | 17.2 |
| 多くの人前での発表・プレゼン | (n= 87) | 16.3 | 24.4 | 30.2 | 18.6 | 10.5 |
| 情報を収集し、自らの考えをまとめ、レポートを作成すること | (n= 87) | 12.6 | 28.7 | 27.6 | 20.7 | 10.3 |
| 授業 (講義等) の予習・復習 | (n= 87) | 14.9 | 23.0 | 31.0 | 24.1 | 6.9 |
| 授業の宿題を期限までに提出すること | (n= 87) | 3.4 | 5.7 | 11.5 | 31.0 | 48.3 |
| 新たな企画を考えると | (n= 87) | 18.4 | 33.3 | 25.3 | 14.9 | 8.0 |

8

「グループで自分の意見を述べる」とPROGの結果



「多くの人の前でプレゼン」とPROGの結果



データを活用した社会人基礎力育成のための 「アクティブラーニング化」の方針作成

エビデンス(PROGの結果、アンケート調査の結果)

- ・学生の強み(協働力)をさらに伸ばし、弱み(自信創出力、感情制御力)を強化したい
- ・「協働力」、「自信創出力」、「感情制御力」が高い学生は、高校時代、グループで自分の意見を述べたり、多くの人前でプレゼンテーションをしたり、新たな企画を考えたりした経験が多い
- ・本学の学生には、高校時代にプレゼンテーション、企画を経験した学生が比較的少ない

仮説:

「協働力」、「自信創出力」、「感情制御力」の育成には、プレゼンや新企画の提案の取り組みが有効



「協働力」、「自信創出力」、「感情制御力」を高めるため、必修科目の中に、プレゼン、新企画の提案の要素を取り込む

11

プレゼンテーション演習

プレゼンテーション演習 必修科目(1年・前期、2単位)

- ①プレゼンテーションと企画立案の統合
週1回×2コマ連続×15回
前半は、プレゼンテーションのスキル向上を重視
後半は、企画立案能力の向上を重視
- ②徹底した課題のリアルさの追求
- ③本格的なプレゼン大会の開催
- ④チームチーティングで多様な学生に対応
(1クラスに対して教員2名+SA2名)×3クラス
- ⑤SAが活躍

12

プレゼンテーション演習 シラバス

■到達目標

- 1.プレゼンテーションの技法を正しく理解し活用することができる
- 2.自分の意見や考えを制限時間の中で述べるができる
- 3.他者のプレゼンテーションを正しく評価しコメントすることができる

■前半はプレゼンのスキル向上

- 1.ガイダンス
- 2.「発表」
- 3.「構成」
- 4.「制限時間」
- 5.「アドリブ」
- 6.「コメントと批評」
- 7.中間発表ミニプレゼン大会

■後半は企画立案力を向上

- 8.「与えられたテーマの読み解き方」
- 9.「現地取材」
- 10.「資料作成」
- 11.「発表者の役割」
- 12.クラス内プレゼン大会
- 13.ブラッシュアップ
- 14.プレゼンテーション大会
- 15.フィードバック

13

授業の感想(2017年度生)

人前で話すことに苦手意識はないけれど、特別、積極性もありません。でも、授業の雰囲気はとても発表しやすいので、自分の積極性を高めていきたいと思いました。また、社会に出てプレゼンする機会がある時、恥ずかしくなく、堂々と発表できるように成長していきたいです。

自分から何かを発信する時に、自分だけでなく、受け取り手の事を考えて発信していけるようになりたいです。

話して伝えるだけではなく、話の内容も重要だと思うから、この授業を通して、いかに自分の中で要点をまとめて相手に伝わりやすく話すことができるかを目標にしたい。

高校までの自分の考えは1回リセットして、どんなことにもチャレンジする姿勢を大切にしていこうと思えた。

プレゼンテーション大会

H27前期 テーマ zoo～つと好きだから...京都市動物園集客力アッププロジェクト

～女子短大生にできること～

- ・京都市動物園へ提案
- ・審査員 京都市副市長、京都市動物園係長

H28前期 テーマ 化粧品売上アッププロジェクト ～女子短大生にできること～

- ・京都の化粧品メーカー「ゲンブ」へ提案
- ・審査員 ゲンブ株式会社部長、テレビ大阪株式会社参事

H29前期 テーマ

インバウンド時代の到来を踏まえた、グローバル観光拠点としての在り方

- ・京都タワーへ提案
- ・審査員 京都タワー担当者、関西ウォーカー編集長

※司会・進行は、2年生のSAが担当

15

学びの効果 学生の感想(2015年度生)から

実際に動物園に行って取材をしたり、インターネットで情報収集をしたりと、発表に向けての資料集めから始まりました。取材時に、京都市動物園では動物のことを何よりも大切に、第一優先にしているということを知りました。とてもすてきな考えだと感じ、その点もアイデアを出す際には考慮しようと思いました。

情報収集力
課題解決力
構想力

クラス内予選で投票の結果、1位に選んでもらったのですが、私たちの中ではまだまだ納得のいく発表はできていないと感じていました。学校に夜遅くまで残りパワーポイントと原稿を改善して、先生にいただいたアドバイスをもとに、一部考え直しました。本番が翌日だったのでなかなか大変でしたが、プレゼン大会で優勝したい！という気持ちで最後の準備を頑張りました。

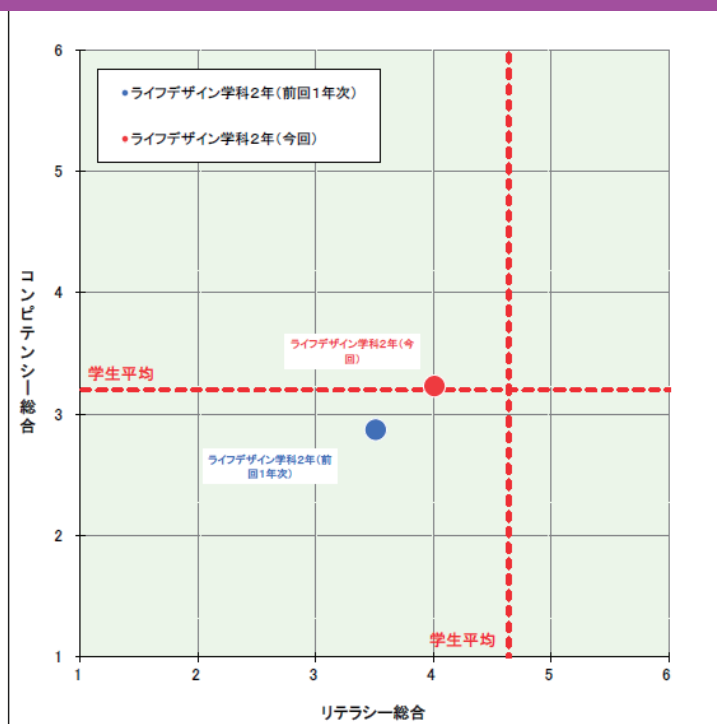
プレゼン大会までの道のりの中で、私は、自分の考えを人に伝えるにはどうすればいいのか、誰もが聞きやすく分かりやすい発表にはどういう工夫がされているのかなど、たくさん学びました。他のチームの発表を聞いて得たものも、いっぱいありました。この経験を大切に、これから更にプレゼンの腕を磨いていきたいと思えます。

對自己基礎力
対人基礎力
対課題基礎力

16

学びの効果 PROGの結果から 2年間で能力の伸長

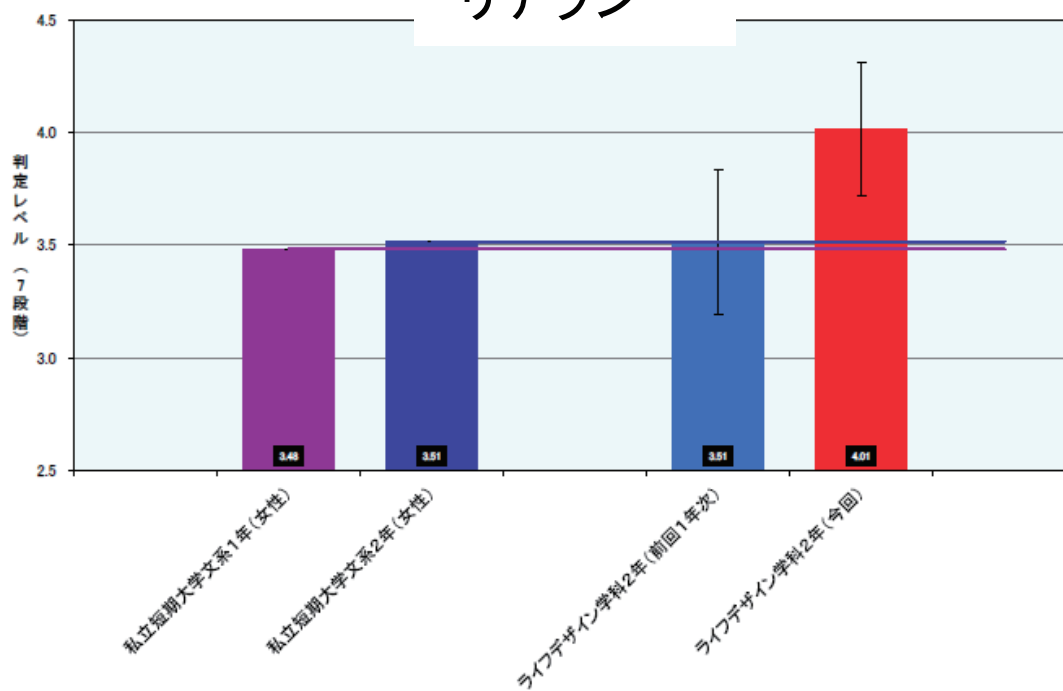
2年間で
 ・リテラシー
 ・コンピテンシー
 ともに伸長



17

学びの効果 PROGの結果から 2年間で能力の伸長

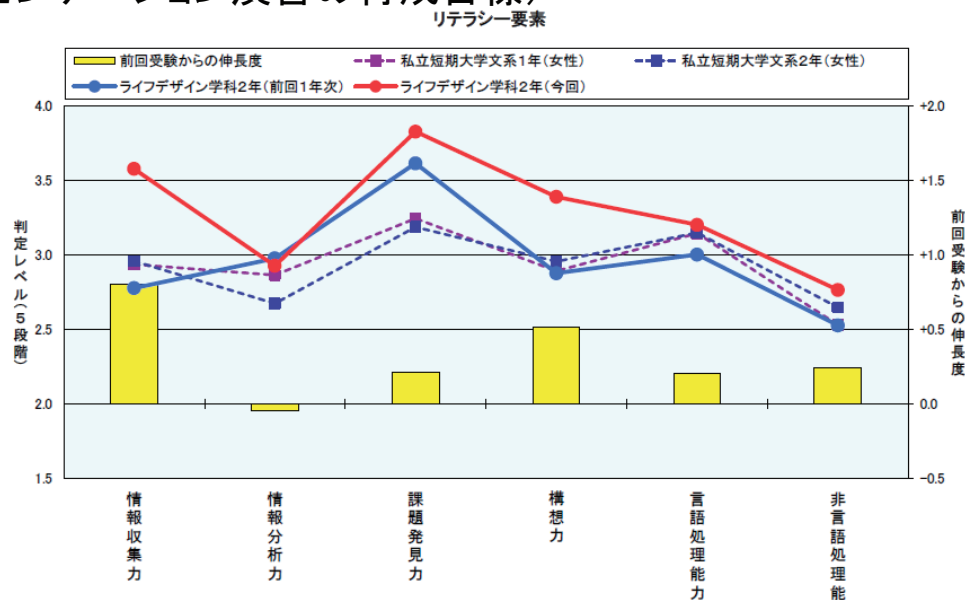
リテラシー



学びの効果 PROGの結果から 2年間での能力の伸長

(2015年度生の結果)

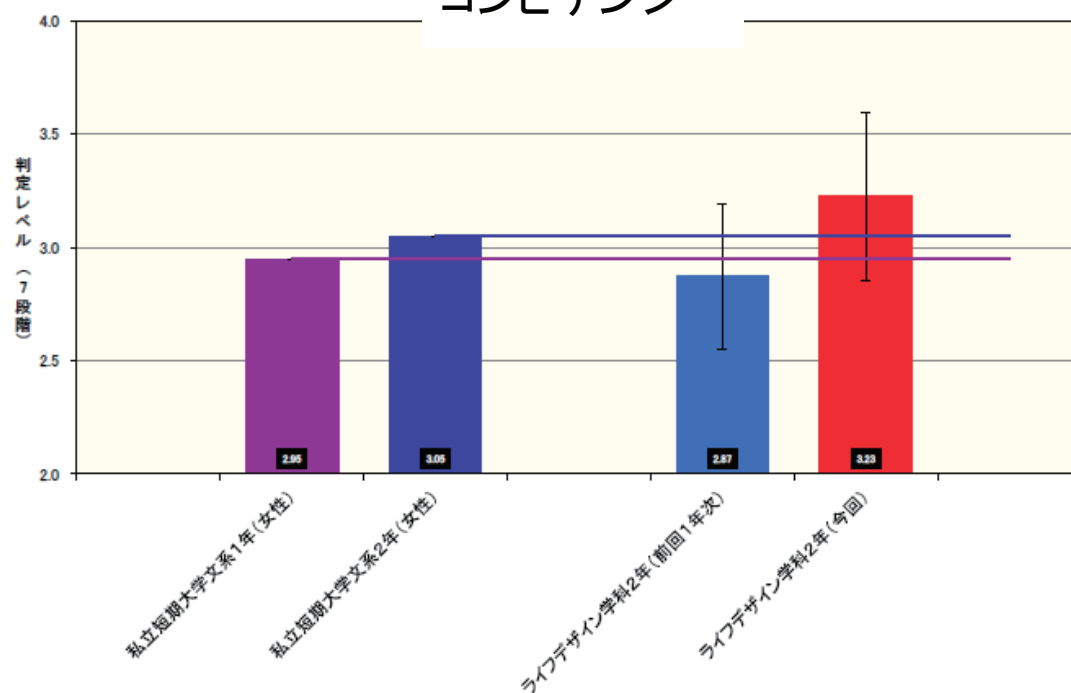
リテラシーは、「情報収集力」「課題発見力」「構想力」の伸長
(=プレゼンテーション演習の育成目標)



19

学びの効果 PROGの結果から 2年間での能力の伸長

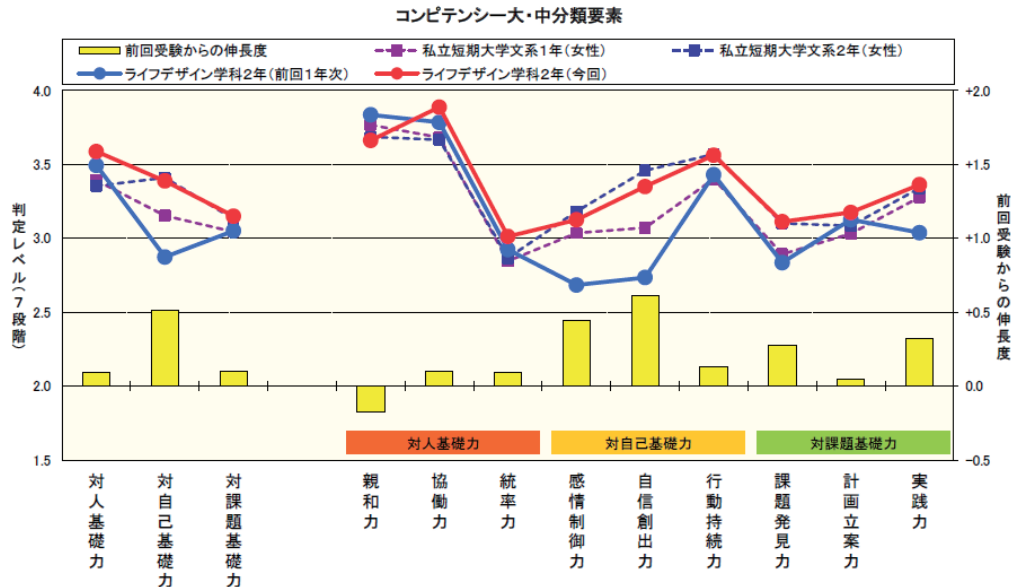
コンピテンシー



学びの効果 PROGの結果から 2年間で能力の伸長

(2015年度生の結果)

コンピテンシーは、「感情制御力」「自信創出力」「課題発見力」「実践力」の伸長(=プレゼンテーション演習の育成目標)



21

学生の評価 インタビュー調査から(2015年度生)

・H29年2月インタビュー実施(2名、インタビュアー:第三者(リアセック))

インタビュー内容

①学業を通じた成長 ②学習経験 ③短大の教育の評価

学業を通じた成長、学習経験

プレッシャーが大きく困難な課題ほどやりがいを感じてやる気がわいてくるようになった。プレッシャーのあることは、終えたとき必ずすごい達成感があるというのを学んだ。しんどいことはしんどいほどその達成感もあるし、自分の思い出にもなるし、力にもなるというのが分かった。難しいことの方がやる気が起きるというように変わった。

きっかけを順番に考えると、まず1年生の前半のプレゼン大会。そして2年生でプレゼンテーション演習のSA経験で、もう一度違う形で学べてとても勉強になった。1年生が成長する姿も見てきたし、アドバイスも簡単に言ったら違うこともあったりするので、自分の中で考えながら1年生と関わっていた。お題は“ネットでしか販売していない、年配向けの化粧品をもっと販売するには、どうしたらいいか?”というような難しいお題で、自分でも考えたし、1年生もみんな悩んでいた。どこまでどうアドバイスしていいのか、というのがすごく難しかったけれど、雰囲気がよくないチームもあったので「どこまで進んでる?」、「じゃあここからこうやって考えてみたらどう?」と声をかけたり、パワーポイントが得意そうな子には「ここもうちょっとこうしたほうが見やすいんじゃない?」というように、チーム全体にというよりは個々にアドバイスしていった。

22

学生の評価 インタビュー調査から(2015年度生)

短大の教育の評価

(1) 専門性について

自分は特定の分野を極めるタイプではなく、広くバラバラに学んでいたタイプだった。自分の興味があることは何でも学べるメリットはあって、それはよかったと思う気持ちのほうが大きい。ただ**専門性に欠ける**とも感じる。「自分が学んだのはこれです」とはっきり言えない。「資格を取ったから、一応このメディカルをやった」というようには言えるが、そちらの仕事に就いたわけでもないし、**他の大学だと専攻でこれを学んでいるというのがあると思うが、私たちにはそれがない。**

→**社会人基礎力育成以外の分野の学びを強化が課題**

(2) 授業の内容について

あえて言うなら、授業が大学の授業らしくない。**あまり課題も出なくて、本当にこれで力がついているのか分からない授業もある。**「この授業って何か意味があるのかな」と感じてしまうこともなくもない。

→**適度に困難な課題を取り入れたアクティブラーニング型授業への転換が課題**

23

企業の評価(卒業生インタビューの結果)

・H28年11月インタビュー実施(6社、インタビュアー:第三者(リアセック))

インタビュー内容

- ①短大卒人材のキャリアパス
- ②新卒採用時に重視する能力及びその評価方法
- ③短大生の印象、評価と短大に期待する教育内容

結果

- 「親和力」「協働力」「実践力」は企業から求められており、短大生に対する評価も高い→**アクティブラーニングの効果**
- 「計画立案力」「専門性」「資格」は短大生に対する評価は低い、企業も求めている
- 「課題発見力」と「論理的思考力」は企業から求められているが、短大生に対する評価は低い
→**今後の教育の課題**

24

卒業生の評価(企業インタビューの結果)

- ・H27年2月インタビュー試行(卒業後3~5年5名、グループ討論、インタビュアー:第三者(リアセック))
- ・H27年11月インタビュー本実施

- ①仕事をする上で大事な能力は？
- ②大学で勉強したことで役に立っている経験は？
- ③社会人基礎力を伸ばすのに役立った授業や経験は？

「**プレゼンテーション**」の授業。先生がテーマを決めて、プレゼンして、上手くいけば企業の人とコラボして、という授業。プレゼンは個人的には好きだが、人前でしゃべるなど考えてもなかった。大変な授業だった。授業に行ったら、急に「1分間しゃべれ」と言われ、授業を受けている何十人の前に立たされて、「1分間、自分の好きなことをしゃべれ」とか言われるので、「今日の授業は何を言われるのか」、いつもどきどきしていた。

授業のおかげで、会社でもプレゼンをする機会があるが、人前に出たり、目上の人としゃべるのも出来るようになった。

→プレゼンテーション演習の効果

25

学びの効果(まとめ)

「社会人基礎力の育成」を目的に、エビデンスに基づき
1年生前期必修科目「プレゼンテーション演習」から
組織的にアクティブラーニングを導入

(効果)

- ・社会人基礎力は全般的に伸長が見られている
さらに
- ・高校から短大への学習レディネス、学習意欲の向上
(仲間と学ぶ楽しさ、学校に来る習慣)
- ・社会に出る準備(就職率:2014年度生=100%、2015年度=99%)
などにも役立っているように感じられる ※さらなる効果検証が必要

早期にアクティブラーニングを経験させることが重要

1年生前期で全学生を対象に取り組ませることが望ましい

26

① アクティブラーニングの拡大と体系化

② 効果検証

アクティブラーニングの導入により、科目の到達目標が達成されているか？
ディプロマ・ポリシーが達成されているか？

アクティブラーニングマスター(ALM)制度の構築

・目的

- ① アクティブラーニングを、『能力に応じて』導入する段階から『必要に応じて』導入する段階へ高める
- ② 内容のみならず、教授法のバランスも考慮した、カリキュラムの全面的体系化を行う

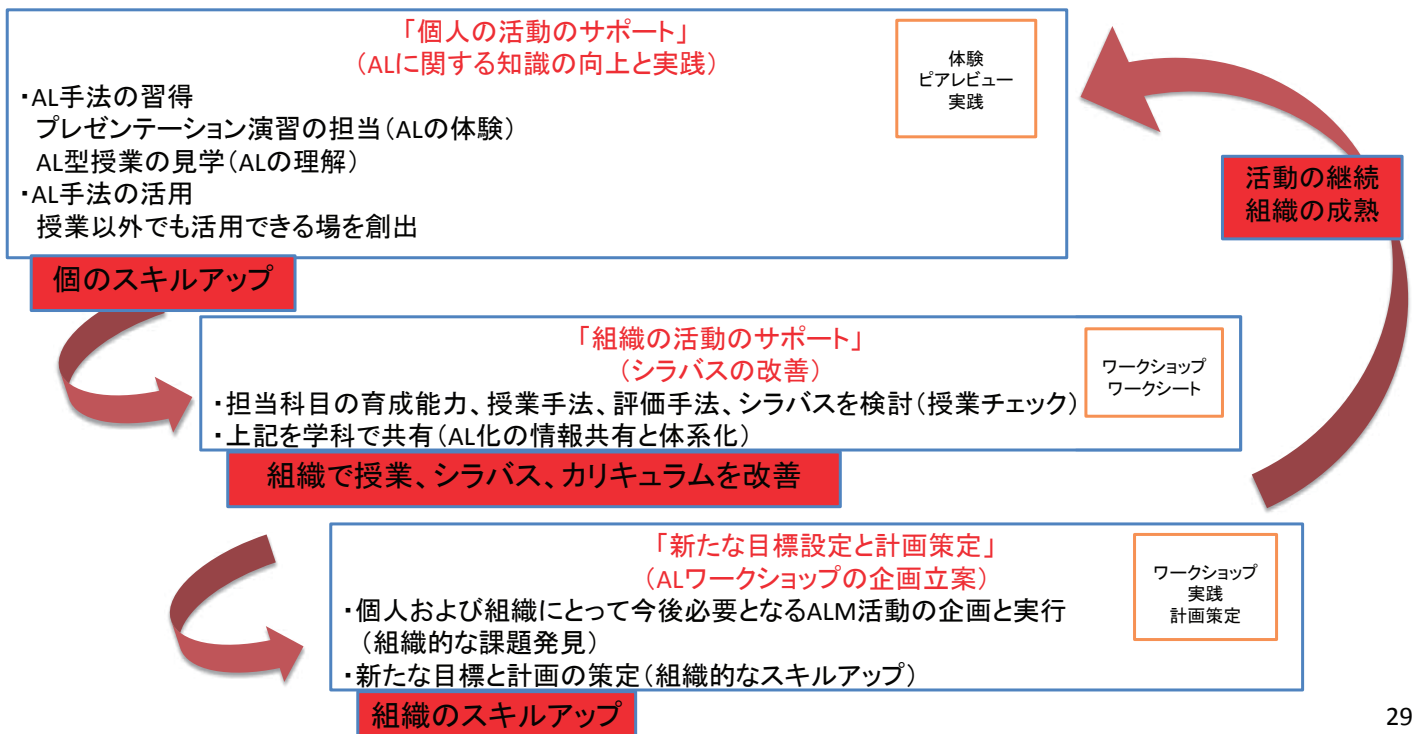


・制度構築の方向性

『個人レベル』の制度と『組織レベル』の制度の2つを一体化
組織の目標を常にスパイラルアップする仕組みも取り入れる

- ※個人のスキルを認定するような単純な制度ではない
- ※制度の名称も、制度を構築してからその実態に合わせ、親しみやすいものに変更を検討

制度の構築に向けて イメージ



29

シラバスの改善に向けて

(一例) 育成能力→授業実践 共有シートの開発

| | 育成能力 | 評価手法 | 授業手法 | 科目 | 分野 | 該当するMDP | 該当するDP | 備考 |
|---|-------------------|--------|-----------------|---------|---------|---------|--------|----------------------|
| 1 | 傾聴力 | ルーブリック | 講義 ペアワーク | プレゼン演習 | ライフデザイン | 1 | 1 | ワークシートが必要 |
| 2 | ブライダルの基礎 知識の理解 | 記述式試験 | 調べ学習 グループワーク | ブライダル総論 | ブライダル | 3 | 2 | |
| 3 | リスニング力 | 実技試験 | 講義 | TOEIC | グローバル | なし | なし | ネイティブの先生 からの指導も必要 |
| 4 | | | | | | | | |
| 5 | | | | | | | | |

ポイント

- 『育成能力→科目の到達目標→ディプロマポリシー』の
関連付け
→育成能力から授業内容を考える逆向き設計の促進
- 育成能力の可視化(どの科目、分野で、どのような能力を育成している)
→授業間の連携の促進
- 授業開発のアイデアの提供
→育成能力に応じて授業手法を使い分ける

30

③ 学修成果の可視化

アクティブラーニングの導入と学修成果の可視化の関連
アクティブラーニングは学生のアウトカムをベースに授業を組み立てること
⇒それを可視化することはアクティブラーニングの活性化には必要不可欠
⇒学修成果の可視化は、アクティブラーニングの活性化と表裏一体

31

ディプロマ・ポリシーを核とした可視化

ディプロマポリシー

各大学，学部・学科等の教育理念に基づき，どのような力を身に付けた者に卒業を認定し，学位を授与するのかを定める基本的な方針であり，学生の学修成果の目標ともなるもの。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/_icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369248_01_1.pdf

ディプロマポリシーを起点に

- ・PDCAを回すカリキュラムマネジメントへ
- ・到達目標型教育(学生が何ができるようになるか)へ

例えば、「プレゼンテーション演習」のアクティブラーニング化は、ディプロマポリシーの達成につながっているのかという意味での効果検証とそれに基づく改善が必要

32

本学の従来のディプロマポリシーの課題と改善

- ・多様な分野から構成されている本学科では、従来の、学科で1セットのディプロマポリシーでは、どうしても全分野を考慮して平準なものとなり、各分野の特徴を取りこぼしていた

- ・達成度が定量化されていない

「お飾り」から現実的目標へ転化が必要

↓

- ・分野ごとに分野の特徴に合わせてディプロマポリシーを設定
＝本学では、これを「ミドルレベルディプロマポリシー」と命名

33

到達目標型教育(学生が何ができるようになるか)へ転換 (1)階層的到達目標の体系化

ディプロマポリシー

↓ 具体化

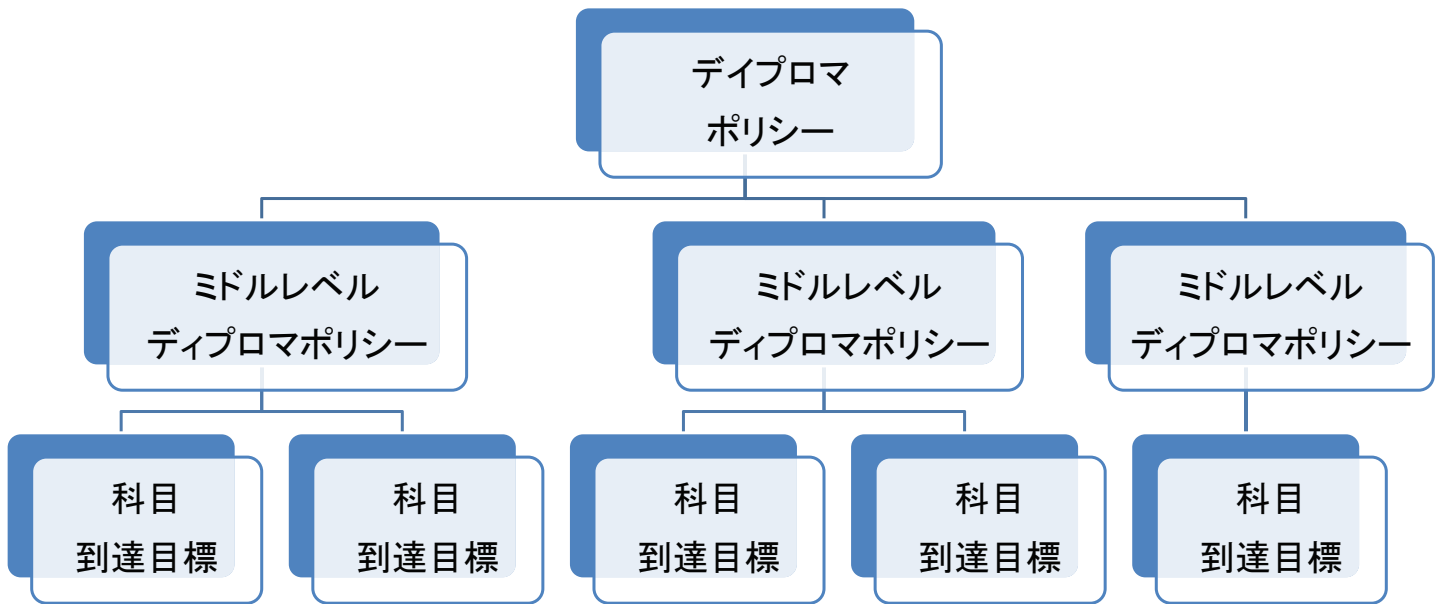
ミドルレベルディプロマポリシー

↓ 具体化＝評価可能なレベル

科目の到達目標

34

到達目標の体系化(3層構造)



ミドルレベルディプロマポリシー(一例)

ブライダル分野

| 区分 | ディプロマポリシー | ミドルレベルディプロマポリシー |
|------------|---|---|
| DP1 こころ | 思いやりの心を持って、学びの意欲を高めることができる | (1-1) 結婚式に関わるあらゆる人たちとのつながりを大切にし、結婚式に込められた思いに共感できる (1-2) ブライダルプロデュースを通じて、新郎新婦をサポートする喜びを知ることができる |
| DP2 教養 | 21世紀の教養を身につけ、広い視野と将来の見通しを持って社会とかかわることができる | (2-1) 婚礼の歴史と慣習について理解する (2-2) 21世紀におけるブライダルビジネスの課題を理解し、これからの可能性を考えることができる |
| DP3 人材 | 社会に生きる人材として、多様な知識や技術を身につける | (3-1) 人生の一大イベントである結婚式をプロデュースするための知識と技術を身につける (3-2) ブライダルビジネスで必要とされるコミュニケーション能力、企画提案力を身につける |

効果検証に向けて ディプロマ・ポリシーを核とした可視化

到達目標型教育(学生が何ができるようになるか)へ転換 (2)3つの評価の可視化 (評価の拡大)

①科目の到達目標の達成度の可視化:

最終評価だけでは先に進めない

②学生の到達目標達成度の自己評価の可視化:

学生が何ができるようになったと自覚しているかが大事

③ディプロマポリシー、ミドルレベルディプロマポリシーの達成度の可視化:

DP、MDPを「お飾り」から現実的目標へ転化

→ 総合的評価提示システムの開発

37

総合的評価提示システムの画面イメージ

到達目標の入力

シラバスで記入したものと同一到達目標をnaviで入力

カリキュラムマップ科目一覧>科目到達目標

戻る

2015年度 100100 ファッションディスプレイ実習

コピー

| No. | 科目の到達目標 |
|-----|--|
| 1 | ディスプレイマネキンに対して、ピンワーク(ピンを用いて生地を巻き、あるいはとめつける技術)による服飾デザインの基礎立体表現ができる。 |
| 2 | ディスプレイマネキンに対して、ピンワークによる服飾デザインの応用立体表現ができる。 |
| 3 | ディスプレイマネキン及び人体に対して、ピンワークによる服飾デザインの創作立体表現ができる。 |

行追加

確定

総合的評価提示システムの画面イメージ

カリキュラムマップの設定

科目の到達目標とミドルレベルディプロマポリシーの関連度をnaviで入力

カリキュラムマップ科目一覧 > カリキュラムマップ設定

2015年度 100100 ファッションディスプレイ実習

ライフデザイン学科 分野:ファッション

* これまでディプロマポリシーとの関連度を
入力していたが、今後はミドルレベルディプロマ
ポリシーとの関連度を入力

| ミドルレベルディプロマポリシー | | | | | | |
|-----------------|--|--|--|--|--|--|
| ① | 時代ごとに変遷するファッションについて専門的な知識を身につけて、広い知識でコミュニケーションを行えるようにする。 | | | | | |
| ② | 現代ファッションを理解して、アドバイザー的な位置にたどり着く。 | | | | | |
| ③ | ... | | | | | |

凡例 ◎:DP達成のために特に重要な目標
○:DP達成のために重要な目標
△:DP達成のために望ましい目標

| 科目の到達目標 | | | | | | |
|--|---|---|---|---|---|---|
| 1.ディスプレイマネキンに対して、ピンワーク(ピンを用いて生地を巻き、あるいはとめつける技術)による服飾デザインの基礎立体表現ができる。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| | ▽ | △ | ▽ | ○ | ▽ | ▽ |
| 2.ディスプレイマネキンに対して、ピンワークによる服飾デザインの応用立体表現ができる。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| | ▽ | ▽ | ▽ | ○ | ▽ | ◎ |
| 3.ディスプレイマネキン及び人体に対して、ピンワークによる服飾デザインの創作立体表現ができる。 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| | ▽ | ▽ | ▽ | ○ | ▽ | ◎ |

総合的評価提示システムの画面イメージ

到達目標の達成度入力 > 採点登録 > 到達目標登録

戻る

* 成績入力時に、素点だけでなく、
各到達目標の達成度も入力

試験(登録期間内)

| 項目 | 科目の到達目標 |
|----|--|
| 1 | 1.ディスプレイマネキンに対して、ピンワーク(ピンを用いて生地を巻き、あるいはとめつける技術)による服飾デザインの基礎立体表現ができる。 |
| 2 | 2.ディスプレイマネキンに対して、ピンワークによる服飾デザインの応用立体表現ができる。 |
| 3 | 3.ディスプレイマネキン及び人体に対して、ピンワークによる服飾デザインの創作立体表現ができる。 |

| 学籍番号 | 学生氏名 | 素点 | 評価 | 項目 | 達成度評価 |
|------------|--------------------|----|----|----|-------------------|
| 031A--0024 | スズキタロウ 鈴木太郎 | 90 | S | 1 | 未◎ 1○ 2○ 3○ 4○ 5○ |
| | | | | 2 | 未◎ 1○ 2○ 3○ 4○ 5○ |
| | | | | 3 | 未◎ 1○ 2○ 3○ 4○ 5○ |
| 061B--0002 | カタオカ タツロウ 片岡 達郎 | 80 | A | 1 | 未◎ 1○ 2○ 3○ 4○ 5○ |
| | | | | 2 | 未◎ 1○ 2○ 3○ 4○ 5○ |
| | | | | 3 | 未◎ 1○ 2○ 3○ 4○ 5○ |
| | キヨハラ ミコル | | | 1 | 未◎ 1○ 2○ 3○ 4○ 5○ |

総合的評価提示システムの画面イメージ

学生による到達目標達成度の自己評価

*** 学生は、教員が成績評価をしている同じ時期に、科目の到達目標達成度の自己評価を行う。**

達成感ポートフォリオ

ピンディスプレイ演習

ディスプレイマネキンに対して、ピンワーク（ピンを用いて生地を巻き、あるいは縫製技術）による服飾デザインの基礎立体表現ができる。

達成度自己評価（必須）

100%
 75%
 50%
 25%
 0%

自己評価の理由を200字程度で書いてください。

到達目標の

総合的評価提示システムの画面イメージ

学生への成績提示

- ・成績だけでなく到達目標の達成度評価も提示
- ・教員評価と自己評価が並列表示

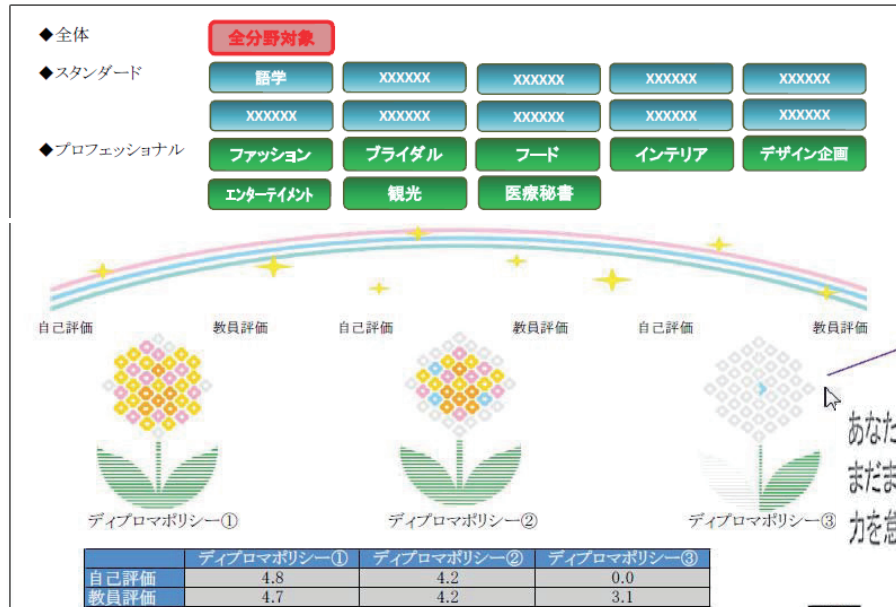
戻る

1. 到達目標の達成度表示

| 学科目 | 成績 | 科目の到達目標 | 自己評価 | 教員評価 | 甘口度 | 辛口度 |
|-------|----|---|------|------|-----|-----|
| 英語 I | B | 英語のさまざまな品詞の概念・意味を説明できる | 3 | 4 | 4 | 1 |
| | | 英語の品詞と英語の文法との間の関係を説明できる | 5 | 3 | | |
| | | 英作文をReading・Writing・発表できる | 4 | 2 | | |
| 英語 II | A | 英語の文法・作文・Reading・Speakingを向上させる | 3 | 4 | 0 | 4 |
| | | 英文法の理解・英語語彙の知識を向上させる | 2 | 4 | | |
| | | 英作文を勉強させる(自己紹介書・話・物語の要約)・発表・Readingを向上させる | 3 | 4 | | |
| ... | | | | | | |

総合的評価提示システムの画面イメージ（学生）

- ・達成度が花の完成度で表示(下に数値も表示)
- ・教員評価と自己評価が並列



あなたへのメッセージ:
 まだまだ、伸びしろがあります。努力を怠らず、学習に励んでください。

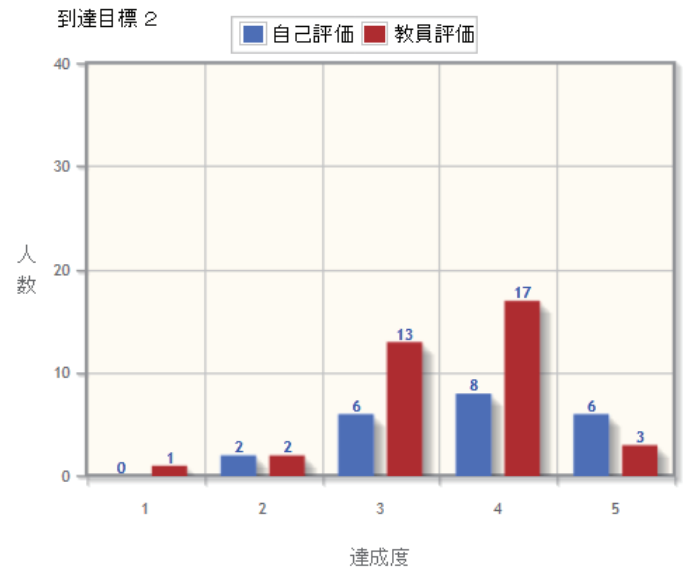
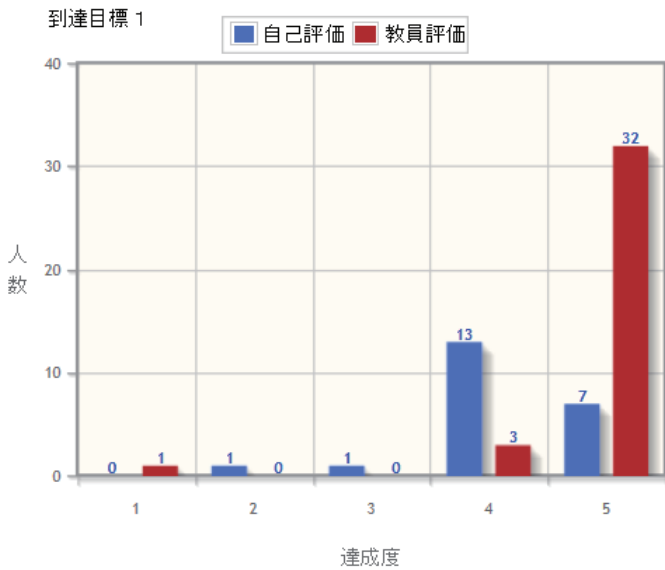
総合的評価提示システムの画面イメージ(教員画面)

T1043 プレゼンテーション演習 I c

| No. | 科目の到達目標 | | | | | |
|-----|---------------------------------------|---|---|---|---|---|
| 1 | 1.プレゼンテーションの技法を正しく理解し活用することができる。 | | | | | |
| 2 | 2.制限時間内に自分の意見を述べ、他者の意見に質問することができる。 | | | | | |
| 3 | 3.グループの中で自分の役割を見つけ課題解決のために取り組むことができる。 | | | | | |
| 80 | A | 1 | 5 | 5 | 2 | 0 |
| | | 2 | 4 | 4 | | |
| | | 3 | 5 | 3 | | |
| 80 | A | 1 | 4 | 5 | 0 | 1 |
| | | 2 | 3 | 3 | | |
| | | 3 | 3 | 3 | | |
| 77 | B | 1 | 4 | 5 | 0 | 3 |
| | | 2 | 2 | 4 | | |
| | | 3 | 3 | 3 | | |

総合的評価提示システムの画面イメージ(教員)

到達目標ごとの達成度の表示



45

成果

- 3つの評価の拡大と可視化がなされた
 - ①点数だけでなく各科目の達成目標の到達度も評価
 - ②科目だけでなく、ディプロマポリシー、ミドルレベルディプロマポリシーも評価
 - ③教員による評価と学生による自己評価を併記
- 成績評価だけでは明らかとならなかった個別の能力の評価が可能になった
- 教育改革のPDCAサイクルを回すうえで重要なデータを蓄積する準備が整った

46

課題

①到達目標体系・評価体系の妥当性の検討

ディプロマポリシーの各項目が、一定独立した目標・評価基準として機能しているか？

DP1(こころ)思いやりの心を持って、学びの意欲を高めることができる

DP2(教養)21世紀の教養を身につけ、広い視野と将来の見通しを持って社会とかかわることができる

DP3(人材)社会に生きる人材として、多様な知識や技術を身につける

(H28年度の検証の結果)

DP同士の相関が高すぎる

(要因)

①MDPの設定の問題(各項目がDPと明確な対応関係を持たず、1つのMDPの項目にDPの複数の要素が混合されている)

②カリキュラムマップの設定の問題(科目の1つの到達目標が、関連するMDPの項目を厳選せず、多すぎるMDPの項目と関連付けられている)

③科目の到達目標の達成度評価の適切性の問題

47

課題

②学生の主体的な学習へとつなげる仕組みの構築

- ・到達目標体系が多様な動機をもって入学した学生にとっては**自分の外の世界**
- ・総合的評価提示システムにより豊富なデータが提供されても、それだけでは**学生の主体的なふりかえりには結びつかない**

(対策)

- ・学生自身が明確な目標を持つ
- ・その目標を到達目標体系とリンクした目標(「深い目標」)へと高める

(計画)

学生と教員が一緒になって行う目標設定・ふりかえりの作業を制度化(29年度入学生から)

48

まとめ

①社会人基礎力育成の分野からアクティブラーニングを導入

→その意義を、様々な指標からも把握(IRの活用)

PROGの結果、学生調査、卒業生調査、企業調査など

②学修成果の可視化

ディプロマポリシーの定量評価に向けて、評価を拡大

→新たな課題を発見

到達目標体系・評価体系の妥当性

学生の主体的な学習へとつなげる仕組みの構築

ご清聴ありがとうございました。

